

第16回 まちとすまいの集い

かしこく住まう

—つながり、まもり、いかす—

少子高齢化や環境破壊問題、エネルギー問題、自然災害問題など、私たちを取り巻く環境は大きく変化しています。そのような状況の中で、私たちは如何にうまく自然と共生しつつ安全安心な生活を送ることができるかが、今後ますます重要になってきます。そこで、今年度の「まちとすまいの集い」は、「かしこく住まう—つながり、まもり、いかす—」と題して、名古屋大学建築学教室に所属する建築計画、木質構造、設備設計を専門とする先生方に、如何に、人とつながり、自然を守り、自然の恩恵を享受しながら、かしこく住まうかについて、それぞれのご専門のお立場から講演いただきます。

2014年11月22日（土）

13:20～16:30

名古屋大学
環境総合館 1階レクチャーホール

名古屋市営地下鉄名城線
「名古屋大学駅」2番出口より徒歩約4分

参加費 無料（定員100名）

主催 名古屋大学大学院環境学研究科 建築学教室

後援 (一社)日本建築学会 東海支部
(公社)日本建築家協会 東海支部
(公社)愛知建築士会
(公財)名古屋まちづくり公社
名古屋都市センター
(公社)空気調和・衛生工学会 中部支部
(一社)建築設備技術者協会 中部支部
(一社)日本建築構造技術者協会 中部支部
なごや環境大学

【開催概要】

日時 2014年11月22日(土) 13:20~16:30
 場所 名古屋大学環境総合館1階レクチャーホール
 参加費 無料(定員100名)

【プログラム】

13:20 主催者挨拶(建築学教室主任 清水裕之)
 13:30 講演① 脇坂圭一
 「ソトマをわかちあう家に住まう」
 14:20 講演② 古川忠稔
 「地域産木材で建てた家に住まう」
 15:10 休憩
 15:20 講演③ 田中英紀
 「自然の恩恵に与って快活に住まう」
 16:10 全体の質疑応答
 16:30 閉会挨拶

なお、12:30より減災ギャラリー(減災館1,2階)をご覧になれます。

【会場案内】



【お申し込み方法】

必要事項(お名前、ご所属、ご住所、TEL/FAX/E-mail)を記入の上、下記までE-mail、FAX、または郵送にてお申し込み下さい。11月12日(水)締切とさせていただきます。

【お申し込み・お問い合わせ先】

名古屋大学建築学教室
 まちとすまいの集い事務局(担当:穂積)
 〒464-8603 名古屋市千種区不老町 C2-④
 TEL:052-789-5233 FAX:052-789-3773
 E-mail:machi@nuac.nagoya-u.ac.jp
 http://www.nuac.nagoya-u.ac.jp/machi/

NEWS! 減災館のオープン

名古屋大学東山キャンパス内に2014年3月、「減災館」がオープンしました。ここでは、減災連携研究センターに関する研究者が最先端の減災研究を行う拠点で、建築学教室教員も兼任教員として関わっています。市民や学生向けに防災



・減災に関わる様々なパネルや教材を展示するとともに、地下の免震装置や屋上階には、地震や建物の揺れを体感できる振動装置を備え、建物全体が実験室として機能するわが国初の研究拠点にもなっています。また、大災害時には大学や地域の災害対応拠点としての機能を果たします。

【講演概要】

① 「ソトマをわかちあう家に住まう」

脇坂圭一(わきさかけいいち) 施設・環境計画推進室 准教授
 専門分野:都市計画・建築計画、建築史・意匠

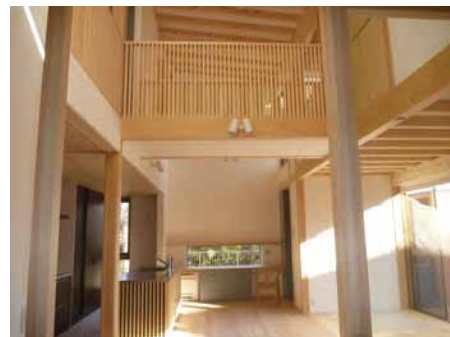
シェアが時代のキーワードとなっています。これを住宅の空間配置に置き換えてみることはできるでしょうか。さすがに内部空間をシェアすることは難しそうです。でも外部空間ならいろいろな空間配置がありそうです。広い庭へ広がる視界、走り回る子供たち、畑仕事をしながらの会話、一休みのための東屋など。もともと日本の建築空間に見られた借景という概念に近いかもしれません。塀や生け垣で閉じた空間配置から、適度に開かれたそれへ。こうした場所を内部空間から延長する外の居間と考え、ソトマと名付けました。地域のコミュニティが弱体化しているといわれる現代においてソトマの持つ可能性を実際のプロジェクトを通して考えたいと思います。



② 「地域産木材で建てた家に住まう」

古川忠稔(ふるかわただとし) 環境学研究科 准教授
 専門分野:耐震構造、木質構造

愛知県を中心とする伊勢湾流域圏には、スギやヒノキを中心とした豊かな森林が広がっています。森林は木材を供給するだけでなく、二酸化炭素吸収や生物多様性の保全、水源の涵養など様々な機能を持ち、これら機能を持続させるには森林環境を適切に管理する必要がありますが、そのためにも国産、特に地域産の木材を「かしこく」使う家づくりの推進が求められています。ここでは、県産材を中心として地域の森林の現状と生産される木材の特性を踏まえ、どのような利用が可能であり、どんな家づくりができるかについて考えてみます。



③ 「自然の恩恵に与って快活に住まう」

田中英紀(たなかひでき) 施設・環境計画推進室 特任教授
 専門分野:建築環境設備

今も寺社建築などで見ることができている部戸(しとみど)は、平安時代に現れた建具の一つです。部戸は、夏の日差しや風雨をさえぎる役割を持つとともに、シャッターのような防犯機能をも持ち合わせた、多機能な建材といえるでしょう。本講では、部戸のような古(いにしえ)に培った合理性の高い技術に着目しつつ、住まいや暮らしを取り巻く自然の摂理にも触れながら、これからの住宅や暮らしのあり方を考えます。また、自然の恵みと先端技術を巧みに活用した低炭素住宅の事例紹介をもとに、自然の恩恵に与って、かしこく・快活に住まう方法について、皆さんと一緒に考察します。

